ヘ13
2378
302

遠 2378 302

壹之巻

序

昔々の鎌倉は。當時のあづまの都なれば。春の長ひ千代も。
絶せぬ松の翠橋。朝日と共に輝く。花の兄。
雲江の子。この手ぶくろ。拾ひ給へ。
前川流は隈取とつて。刷かしこ。
てふ梅の枝ふ枝鬼王は。
年々歳々花相似たり。歳々年々人不同。
見よ大磯の虎は。新板出来。

文政十二丑春稿既
仝　十三寅春新版

十字亭のあるじ
糸井三九

梶原源太景季

おつゑ
枝を
梅
見る
色
かゝ川
うぼあんの
竜錦舎

化粧阪の遊君
梅が枝後
虎御前

熊阪
張樊ゲ
鯨族
磨針
太郎ガ
陸号
海賊の
強盗
日本
駄右エ門
近江國
石山寺の
山門
女順禮
黒川の
渡瀬
花輪堂
三九
山のふもとの石山寺に
かくれこもりて十八や
おさんの乃こゝろぶんまくさらば

ヒゴ武さん
そがたあずまくらを
多人と
いくみすの乃
家九
源家の重器
鐘の竜
蟠
かぶと矢
十字亭
糸丈
曽我五郎時致
幼名
曽王九
化粧阪の
遊君
少将
始唐糸が
娘
此花

詞源あらため

●さるほどに三年後のことなれば昔とちがひぬれども

しかるべきのしかるべきのことにてつくろひ

ろひ

つくさせてさまざまの

つくさせぶんぶんぶくく

けんどのかさんとそ

とことわるさけをかけくまあん

おぼれわつしがこたへの

すをかけとひそうふ

あるところのちくしい

みかりとぎとすけどのへ

そのこころざしひとうず

今ひとぎせふとふくず

しくみたこんとんあんこ

すけどのこそばちくゆうさいに

ろういよくとうるうつをこの

つくかしかりをこのせすけ

どの孤さとをしまくせよ

のひさくまゆえすべ

こまゑかこそふまろべとそのに

つくろかるぞ〜とい

あらため

五

●さるほどに六百ぐれんの

三年後のことなれば

ぶんぶんぶくく

しかるべきのしかるべきのことにてつくろひ

ろひ

つくさせてさまざまの

つくさせぶんぶんぶくく

けんどのかさんとそ

とことわるさけをかけくまあん

おぼれわつしがこたへの

すをかけとひそうふ

あるところのちくしい

みかりとぎとすけどのへ

そのこころざしひとうず

今ひとぎせふとふくず

しくみたこんとんあんこ

すけどのこそばちくゆうさいに

ろういよくとうるうつをこの

つくかしかりをこのせすけ

どの孤さとをしまくせよ

のひさくまゆえすべ

こまゑかこそふまろべとそのに

つくろかるぞ〜とい

義仲粟津の深田の中にて石田為久が射られ戦死す

つゞき

[illegible]

○此義
爲ひを
かるで
神
いさめ
也

「やんや
いや
「これハ
○
つぎき

梅うえん
十四
そのあのうめ
はのまきにあり

十五

四之巻

湖月抄

（つゞき）それがしあるじは
あはせてかうせうてき
かゝこのまんじ屋のろうべー
いどうひとあをと大せいが
おそうけさぞあゝそれがしは
さそにとうとあさんげくれろまく
かくへいのちかぞうりと
せいろうさくそのまく
ようにとび入ようろうが
おるけさて元じよの
ぞめがたちさうぐ
うちあさこうろうそろ
うにおくぞいぐの字へ
とそろ弁ずしいろぞう
おきさつうんとおもひさく
うるそふうびうち
とにいうそうの大ぜん
のやよくめさうちかくつき
そのにてぶれ衣とぞこう世
それがしをかざこうつとにく
ぶれはうら入ひさとあげそうが
そのぬ縁へするしぶらかへぞくの
ちやうぶんにろうんざえりんとう

●あるさのてまうさ給さ世じ
うちにうれうだくへひぞ
うにぬけくふげかくれ
ちやうえんのとのうろ
すぎうろのあさぞのたらく
とこうの上ヒてぬれたつを
そのまくおゝぞくとうろうろ
すおうに加江てうぶじさども
それがしおそてとへおあひもうさん
まあそおうあすり女おのヒと
おあひそくわけさおれバおとゝにく
ようにさくだにれうちてく世と
い多ぞ有むそうおう大ぜいあとくるを
このヒひそそのゆうきうあげ
入れバはうかんざこうんなちばくら
ちとさを世いしそれがしにむかひ
かれヒ入こうおんとてそこかく
ぶれいをとてさ世じもあるさの
人をさゆしるんでてきこ申う
すぐれ一そのへをうる世じさとに
あうまふ入れまさえくにも
たよのめのるそのあるこかくで
うらおすうつゆへてにへ

又とへびとれとをはんじのちおうおそう
ぐんやまうの女のれ手のたりけれく
ちおうえんがてうぶじとあぎうひふ
みのけのげんとやうと書つかく
げんじをやうるぞてんろをはなう
れう世んのさてとうあるそこの
女のれをまつくさんのぞあにすみをを
ちおうあてくすうのけつかうゆうと
とこひくさそてとそやんにさかにと
太さにはうとびすうあゆちのへ
うびひとりくさうれとそとのあのれの
あとじうぞうそ字一ぶ世ぶれをもの
みぶ弁さあむむなりうんもうへけ
けのよういまとあつめんとあれバ
いよくいけてあおうく世じとそうくに
そうちく世じおかけれくへすじひやくの
大ぜいのあれべつのおちらくに苦ま
りおじよくそのすへうむきとび
入りくおよぎそさえてるそのあて
うくゆきぎさたやけ絃
かうふ上ヒかはじけるをもよと
あじきぞのをとあのかてう
すゝかちとれやとう日いわう

ゆきのにはくいせんにあらさう
ちおうえんぶてあさこのたゝぞく
みにするとや太弁と
よろれさうのにはくとぞの
てぞうをふ九弁ろうんど
いさのあぞよひさうれ
あるこのまへで給
田わう分のに口う
わくたらくぞあるさ
ぬ子ぞとりまうへ
かやいまれ女のをとくへ
とれをぬ子さぞいろ
まちにろやとあるど一
ぞうやうぬれ衣のこ
のやよくにうぜんさあんと
そのやさとうのまへの
たの上ヒさをつく手は上ヒ
ゆるさそさ女のを
よきのあ弁くにく
かねにやあさでうじう
さく縁をことを
ほつとう九のあん
さう一ぐさこやく●

のとろはすぐやぬきさうろ
おのぞひうなやおんさも
いるよやそれバしかじこと
あうやうとうけのおけあらくを
つくこれをとのそれがしあとた
さきおもあつぞうよ山にくすまのの
とそもふくゆかうとうと弁まさへ
み弁とうりきをもやくらんよく
うべさうごかとびはとよくげんけの
ちおうおえんやあうの守のけをを
たおうりくるがそれがしのゆかや
ものとまくらうおりひとろいさ世じに
さきぞうとくあさこうちおうえんを
いよむうとうにちべくまとさうほじを
ここにとくあさこゆあのひとこるおじき
とうにおもヒがかれらぶうのうち
つくあのべきゆへひんまをを
よかゞひやひうへさん弁とぜじ
コとさとじてさうやりつうりう
あれのうちにとびあることとそう
むうりにてこれバあれとゑ系して
上ぞんのまへおぞりでそことそとえ
このヒとけんヒてまうるあやもものはじをそ又

ようかのあのれをのじそ手すればバ
かげすきもいゝやそのおかある
あのれるれバそのことうさそきを
かれじ入りけやあすふさおれじの
きもんいさゆじまずとぶえうきさゆると
てへくちうさんにてりかりてれ
よりてふとどすうのてよりもらく
あうは給をめへ世んろとぞじのとにに
かう来おむすめとのまれハふろコホ
あヒとさ来さるたんかせつヒおちく
ころ横くにかくさびゆのひうちヒ
きふきまとてのあれのこてくたつらく
りくりがそのうちとの女のおやとき
おれかうぶのコトのおんひともとおちヘ
たつみおうくてゝいつのまへぞいさえヒ
ここるめてひとまさこのそひにりけのの
なけれとことあれバてきこれもいづさ
あいてまいうりしきぞのとおもきて
あれくりとぞれさうかあたへそぬきの
とのとうそのヒつゆうぐたれとあけり
○とてはまとけてそのいえうあわてた
まいとてのすうかゝとのとき有
とあうとのつゞりのゆかせじ

（つぎへ）

六之巻

十字亭作陵分
○青雲のさ帽一草 五冊
○坂東太郎 竪石作 五冊
○振分髪の浦秋 五冊
同じく中分
○おろの院 ○その行
○い谷の滝水
○その外さて出板ゆゑ
ちんしゃ色く
ま帯の

文政十三庚寅春　鶴屋喜右衛門　板

御免江戸暦開板所　毎年十月下旬頃より賣弘め申

載陽帖　全一冊　南山禪師書　四季和文章　石摺

新撰　日本名所之繪　唐紙摺一枚　蕙齋鍬形絵真筆

新撰　女古状　揃　半紙本　両品出来　高井蘭山編撰

還堀紙料　柳亭種彦隨筆　古画入二冊

田喜菴輯　芦のしたもえ　幻住菴記　一冊

簑笠翁隨筆　玄同放言　初編二編　共二冊

庚寅春新販書目　通油町仙鶴堂蔵

三馬・柱木校輯
芳艸集　全二冊　校
開閲ハ刊本あまた [illegible]

同輯
楚蘭集　全三冊　追 [illegible]

戯筆
歡童遊言画手本　一名 鳥羽繪早まなび　出来

廣益塵劫記
懐中早割大全　小本一冊 [illegible]

新形染彩目
植花手引草　前北斎為一筆　後編嗣刻 [illegible]

芝居役者
似顔早稽古　後編　全一冊　五渡亭國貞画 [illegible]

八文字自笑評
三箇之津役者評判記　全三冊
藝品定　[illegible]　役者 [illegible]

即考百戯　全一冊 [illegible]

陶朱公天授秘法懐中御守薬　一包代弐百二十三銅

富貴自在　運利香

東都　細川起規精製

賣弘所　江戸横山町三丁目　岩戸屋喜三郎

此薬の義ハ男女とも運のつよくなること [illegible] 此運利香を懐中 [illegible] 大人小児とも [illegible]

芸十六帖

紅葉の部